九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

透谷の女性観 : 幼少年時代の透谷が女性から受けた影響

楊, 穎
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/24627

出版情報：Comparatio. 14, pp.17-26, 2010-12-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

透谷の女性観

―幼少年時代の透谷が女性から受けた影響―

楊　穎

一　継祖母・ミチ

まず、幼少年期の透谷の家庭環境を先行研究によって確認しておきたい。

継祖母・ミチは文政九年（一八二六）七月三日生まれで、祖父玄快より十一歳年下である。入籍は慶応三年（一八六七）の四十一歳のときであるが、玄快とミチとのかかわりがいつはじまったのか、どういう事情で、チカ（透谷の実祖母）が離別されてミチが後妻に入ったのかは不明である。ただ、入籍一年後に生れた透谷とともに北村家におり、明治二十八年十一月二十六日、すなわち、透谷の死の翌年に没するので、ミチは透谷の生涯より、前後それぞれ一年多く北村家にいたことになる。玄快が明治十七年に没してからは、ミチはひとり小田原の北村の家でかなり長く生活したようである（注一）。

透谷が四歳の時、父親が仕事のために、上京した。母親は生まれたばかりの弟を連れて一緒に上京したが、透谷は明治十一年まで、祖父母の下に残された。つまり、明治六年～明治十一年（四歳～九歳）の五年間、透谷は祖父と継祖母の傍で育てられた。

透谷の「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）に「明治六年、生の父母は生を祖父母に托して東都に去れり、十一年まで五年間、生は全く祖父母の膝下に養育せられけり」（注二）とあるとおり、満四歳から九歳までの幼年期の門太郎のめんどうはみな、このミチが見たはずである。「生の祖父は凡そ世にめづらしき厳格の人にして、活溌に飛はねる事を好む少年をこらすの術に苦しみたる事、今もしば〳〵祖母の物語に聞き得る事どもなり、又た今でこそ至って温順なれど其頃は生に取りてあまり利益を能へしとは覚へず、何となれば彼れは実の祖母にあらずして生に対してはまま祖母たる人なればなり」（注三）と同書簡に書かれている。また、小田切秀雄編の「年譜」によると、明治六年（一八七三）透谷の四歳の時に「父快蔵は足柄県役所では庶務課員。五月三〇日、弟垣穂が生れた。秋に父母は弟垣穂を連れて東京に移住、父は大蔵書に勤め、母は日本橋照降町呉服屋をひらいた。透谷はこれ以後明治一一年までの五年間、祖父と継祖母のもとに残された」。「祖母は継祖母で愛情が薄かったらしい」（注四）ということである。

『近代文学研究叢書』によると、「祖父玄快はかつて小田原城主大久保忠隆に仕え、藩医を勤め且儒学にも通じていた。透谷の生れた頃は明治維新の大変改が行われた折で一夜にしてその環境を異にした。祖父は一家を治めるにも又孫なる透谷の養育に当たっても昔風の厳格な態度でのぞみ、殊に武士道精神の権化とも云う北条早雲の不撓不屈の闘志を学ばせたいものと幼い門太郎に説き勧めて、不羈奔放な少年の性情無理やりにも規則にあてはめようとするところがあった。教育上で祖父には祖父の形があり、門太郎には門太郎の形が生れようとして必ずしもその方向が一致しなかった上、継祖母も親身に世話すると云うのでないから、女性ら

しい細やかさと暖かい愛情にも欠けていたので、退いて独りもの事を考えると云う風になり勝ちであったらしい」（注五）。また、平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』も、「食事・洗濯・衣類・寝具・掃除・買物、日常の仕事はすべてミチにかかり、とりわけ、いたずら盛りの門太郎にはほとんど手を焼いたと思われる。「世にめづらしき厳格の人」である玄快の叱責から、門太郎をかばうのも限度があったはずで、「我が利益には余り心配せぬ祖母」と門太郎の眼に映っていたとしても無理からぬ話である」（注六）と指摘する。

幼児心理学の研究によると、多くの学者たちが子供の性格形成にあずかって力あるのは幼児期の経験にあると主張している。特に「母親をはじめとする家族成員の養育態度を通じて幼児はしだいに社会化されるが、それを契機として、後に社会においてつくりあげねばならない人間関係の基礎もこの時期にできあがる。したがって、幼児期は生理的・心理的な基本的な体制が確立されるきわめて重大な時期であるといえる」（注七）と指摘されている。そして、子供が三～四歳ごろになると、「第一反抗期」と呼ばれる時期に入る。「しばしばいままではよくいうことをきいた子どもが急にわけのわからない強情をいいはったり、親のいうことをことごとに否定したりするようになることがある」（注八）。さらに、三～四歳頃からはじまって八歳ごろまで、子供が収集癖の時期に入る。想像力がもっとも活溌にはたらく。子供が様々なことに興味を持ち、次第に質問が多くなる。「質問期は五才ころにもっとも顕著に現われるといわれているが、このころになると、子どもたちはきまり文句のようにつぎつぎ「なぜ」とか、「どうして」という質問を提出して親たちをなやますのである」（注九）とされている。

三～四歳ごろになると、子どもの身体は充分に発育し、活動力が旺盛になって、その活動範囲が急激に拡大される。同時にまた言語の自由な駆使も、かれらの生活領域を拡大させる。自分以外の「他」の世界が在るということが意識される。そして、他を意識することによって、はじめて自分というものが意識されるのである。一方、われわれおとなが見ている物がしばしば子どもには気づかれないが、その反対におとなが注意していないようなものが子どもの意識の中にある。よく「なぜ」とか、「どうして」という質問を提出し、親たちをなやます。祖父と継祖母がこの時期の透谷の細かい変化に気に掛けたか、透谷の質問に親切に答えられたかどうかは疑問である。

鈴木秀男『幼時体験―母性と父性の役割―』は、昭和四十五年に、異常な死を遂げた作家三島由紀夫が生まれて四十九日目に祖母によって母親の手から奪われたことを例にあげて、「子供にとって、祖母というものは、母親に比べるとはるかに疎遠な存在である。つまり、母親代理者としての祖母は、子供との関係における直接性、自然性、かつ必然性において、母親に比べるとはるかに劣るのである。したがって、すべてがうまくいったとしても、子供は母親代理者としての祖母にどうしても不安を抱かざるをえなくなる」（注十）と指摘している。また、昭和二年に、睡眠薬自殺を遂げた芥川龍之介は出産後生母の精神異常がひどくなったため、九ヶ月の頃、生母の兄夫婦のところにひきとられた。かれら

にとって「母親の代理者は、どことなく疎遠なところのある存在であった。そのため、自分がほんとうに母親代理者に所属し、保護されているという確かな感触を与えられなかった。それに、かれらが現実に対して根強い不安を抱く原因があった」（注十一）。

透谷の場合は、母親の代理者であった祖母は継祖母であった。五年間、愛情の薄かった継祖母の傍に残されていた透谷にとって継祖母と心を触れ合わせることは難しかったのではないか。愛情の基盤を持つことができない透谷は心の奥で母親の帰りを切に望んでいたと考えられる。明治十一年（九歳）、透谷の祖父が中風にかかり、父親は官を辞して、母を伴い小田原に帰った。首を長くして待つ母親がやっと帰ったわけである。しかし、透谷は期待していた母から愛情を得ることができただろうか。

二　母・ユキ

嘉永二年十月十八日、小田原藩士大河内宇左衛門・マキの三女として生れた。北村家四十二石をはるかにこえる二百石という上級武士の家であり、男兄弟のない五人姉妹である（注十二）。透谷の父親の家庭より相当豊かな家庭で育てられたと言える。「生の母は普通のアンビションを抱けり、則ち生をして功名を成さしめんと思ふの情切なりければ、毎夜一二時頃までも、窮屈なる書机に向かはしめ、母自身は是れが看守人」（注十三）であった。母親は「透谷の戦争遊びを好まず、夜の塾に通わせ、また〃毎夜十二時頃までも〃机に向かわせた」（注十四）と言われる。また、「生の母は最も甚しき神経質の恐れべき人間なり、一家を修むるにも唯、己の欲する如く、己の書き出せる小さき模範の通りに、配下の者共を処理せんとする六づかしき将軍なり」（注十五）というぐあいに、母親の性質を「神経質」あるいは「将軍」などという強い表現で説明している。明治十五年、「生をして殆ど困死せしむべき程の一年なり（中略）その第五は生よりも一層甚しき神経家なる我家の女将軍は生が活溌に粗暴を交へて動作するをいたく嫌ひて、種々の軍略を以て生を圧伏せんと企てた」（注十六）。透谷は四歳から九歳の時まで母親と離れていた。透谷が母親の愛情を切に求めるのは透谷は子供としてごく普通の要求であろう。「将軍」みたいに子供を教育する母親が透谷の目に非情な人間に映ったのももっともなことであっただろう。

このような成長経験は「幼少期の自立に際し、愛情基盤を欠いた、いわば棄てられた暴君として成長せざるを得なかった。透谷四歳から九歳までの精神的外傷は母子対立の一因をなすものであろう」（注十七）と大田正紀が述べているが、母の愛情が欠如した状態で育てられた子供のその後の人生にどのような影響を出てくるかについて以下に児童心理学の研究に依拠しつつ、一般論として検討してみたい。

親子関係について言えば、「乳幼児期の愛情は母親との間に発生し、しだいに家族へ拡大されていく」（注十八）。母親に対する大きな感情の一つは、母親から「安全」と「保護」を求めたいという感情である（注十九）。「養育態度と子どもの性格との関係にはあるていどの関係はあることはいえるが（中略）育児に当たる母親の人格、それに、親子関係における関係のあり方が、子供の性

格形成に、かなり重要な影響を与えることが示唆される」(注二十)。さらに「幼児に対する母親的養護のはく奪が長びけば、幼児の性格および、幼児の将来の生活全体にゆゆしい、かつ、広範囲の影響を与える」(注二十一)。透谷の場合は五年間、母親による養護が欠落し、しかも、その後、同居するようになった母親からも「安全」と「保護」をまともに受けていないのである。

ボウルビイによると、「おそらく、今日の私たちは全員が、愛する人々から別れることによって生じる不安や悲嘆、死別によって生じる深く長い悲しみ、そしてこのような事件がひきおこすかもしれない精神衛生への危機を鋭く認識しています。一度眼が開かれると、私たちが治療する患者さんのトラブルの多くは、少なくとも一部分は、最近か、または人生の初期階段でおこった別離か喪失にまでさかのぼることができることがわかります。慢性的不安、間けつ的抑うつ、自殺未遂や既遂は、上に述べた経験に由来する一般的トラブルです」(注二十二)とされる。特に、「人生の最初の五年間での、長びいた、またはくり返された母子間結合の崩壊は、後年の精神病質人格や社会病質人格と診断される患者さんに特に頻回に見られることが知られています」(注二十三)。これによると、人間の最初の五年間の母子のあいだの結びつきが子供の後年の人格形成に強く関わっている。さらに、小児期に親を喪失する体験は、後年の慢性的不安、間けつ的抑うつ、自殺などと関連性があるとされる。透谷の後年の自殺は幼年時の母親との離別と関係している可能性があると考えられる。

また、母子のスキンシップの重要性については、「スキンシップによる母子の身体的接触は、心の絆を築くために必要不可欠だと言われており、子育ての土台となるべきものである。この土台を欠いた子どもは、絶えず不安感や恐怖感に悩まされることにもなる」(注二十四)というように考えられている。透谷の場合、母親不在の五年間、「スキンシップによる母子の身体的接触」がほとんどなかったと考えられる。健全に成長する土台を欠いた透谷は不安感や恐怖感がつのったことであろう。それは後年の透谷の気鬱病が発する原因の一つになったのではないかと思われる。

S・ジョンソン、S・ルーゼンスキー編『精神分析的心理療法の現在　ウィニコットと英国独立派の潮流』によると、「安全で予測可能な、物理的にも情緒的にもそこに居る母親が居ないと、空虚感や他者との結び付けなさを避ける試みがなされ、スプリッティングが生じ助長される。(中略)母親の物理的あるいは情緒的不在によって養育の中断を体験している患者の場合、このことは特にあてはまる。こうしたタイプの患者は融合と暴力的離脱の間を常に揺れ動き、治療には非常に困難がつきまとうことになる」(注二十五)。四歳の透谷は突然、母親と離れて、不安感を抱き続けたと考えられるが、さらに、母親による養育中断期間の長さが重なって、後年の透谷の精神的な病気の要因になったと思われる。それについて、透谷は後に妻となった美那子への手紙の中で、「又た生は父母祖父母、皆、愛情に薄き人々なりと思ひ込みければ、生を親愛する者一人もなく、人生の価値とすべき所なしと考へ居けり、是れ即ち後に生をして気鬱病を発せしむべき最大なる原素なるべきか」(注二十六)と述べている。

透谷の母親を鈴木秀男は「過干渉（支配的）な母親」と定義する。このような母親が「子供の自然的な欲求を無視して、自分の思い通りに生きることを強要する」。「子供は自発的な意志など育てることはできない。とすると、母親のいいなりに「卑屈に、臆病に、柔弱に」生きるしかなくなる」（注二十七）。「過干渉（支配的）な母親は自己満足にふけっているだけではないか、あるいは、子供に迫害を加えているのと同じではないか」（注二十八）。鈴木秀男は二十五歳の若さで縊死した文学者透谷の幼児体験を例として説明する。「幼い透谷には、母親にほんとうに愛されたという実感を持てなかったとしても、無理からぬことであった」（注二十九）。それによって、「透谷は、誰ひとり心にかけてくれる者のいない家族の中で、その人生をまず生きるに値いしないものとして始めざるをえなかった。そして、そのような幼時の生活に、現在自分を悩ませている欝状態の最大の根拠があることを、彼は自覚していた」（注三十）。さらに、縊死した原因について、鈴木秀男は「縊死の直接のきっかけはとにかくとして、その遠因は「生きるに値いしない」ものとして始めざるをえなかった、幼時の生活にあるのではないか。あるいは、幼い頃から、かれの生存にまつわりついてきた強い「いわれのない不安」を解消する方法は、みずから生命を絶つ以外に見出せないというところに追い込まれたのではないか、という見方もできる」（注三十一）と分析する。

S・ジョンソン、S・ルーゼンスキー編『精神分析的心理療法の現在』にはまた「母親は情緒発達の中枢的存在である。赤ちゃんにとって母親は生物学的にも心理学的にも最初の環境である。母親が赤ちゃんとの関係でどのように振る舞い感じるかによって、その後の人生における健康は大いに影響を受けるだろう。居ない母親、無能な母親、一定しない母親は映し出しの不足をきたし、結果として、分離が全くしない融合的な母親という理想化された幻想を生むことになる」（注三十二）という指摘もある。これによれば、透谷の母親は不在期間が長く、その結果として透谷は理想化された母親像を抱くことになった。つまり、自分と決して離別しない母親のイメージが生まれたのである。「母親の不在や母親へのひどい落胆があった場合、しばしば母親への非常に強力理想化が生じ、その幻想から離れられず、母親を段階に脱理想化したり母親との融合的関係を段階的に脱理想化したりすることがほぼ不可能となる」（注三十三）。そのため、透谷の心の中で母親の非常に強い理想化が生じ、自分の理想とする女性のイメージが強く定着したのである。これは後年の透谷が接する女性、例えば、恋人を選ぶ時の基準などに影響を与えたのではないかと考えられる。

三　透谷の恋人としての美那子への手紙

明治二十年、透谷は美那子と突如恋愛に落ちた。この年の八月から翌年春まで、透谷から美那子に与えた恋文及び手記は計十通存する。これらの手紙及び石坂登志子あての書簡一通、石坂公歴あて書簡一通、石坂昌孝あて書簡一通、父快蔵あての書簡一通、合わせて十四通を参考しながら、恋愛中の透谷の女性観を検討したい。十四通は以下の通りである。

夢中の詩人（日付不明）

石坂ミナ宛書簡一八八七年八月十八日
（（北村門太郎の））一生中最も惨憺たる一週間
父快藏宛書簡一八八七年八月下旬
石坂ミナ宛書簡一八八七年九月三日
石坂ミナ宛書簡一八八七年九月四日
悲苦の世紀（日付不明）
石坂ミナ宛書簡草稿一八八七年十二月十四日
絶情（日付不明）
在米石坂公歴宛書簡草稿一八八七年十二月十六日
石坂ミナ宛書簡一八八八年一月廿一日
嗟世に愛情より（日付不明）
石坂昌孝宛書簡一八八八年三月廿三日
石坂登志子宛書簡草稿一八八八年春頃

まず、「夢中の詩人」には、「君の富みたる、識見、經験、思想、是三の者は、君と共にあらぬ時にても、常に、僕をして、良友を得たるの、喜悦、をたもたしめ、（中略）ただ、真に思想に、富みたる、会話を好む人を得て、晩食の後、業務の後、に、清快なる談話をなし、尤も楽しき幸福を受けん事よりほかにはなし、（中略）第一、優美を愛する心、第二、理想を好みたまう事、第三、消極的（（に））を以て社界に尽さんと思ひ玉ふ事、右は他の俗論者に反して、独り君に、見出したる、尊敬すべき性質なりかし、」（注三十四）とある。透谷は美那子と出会ったことで「良友を得」、「会話を好む人を得」たと述べていることから見れば、透谷が心を思い切って打ち明け、心を通わせる人と出会うことをいかに切望していたかということがうかがえる。

「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）には「生は貴嬢の風采を慕ふ事いと永かりし、而して親友たるの時日は斯の如くそれ短し、生は貴嬢の親友として世を送るを得ば、他に何の求むべき幸福あらんやと曾つて思考したりき、（中略）貴嬢は常に生のハツピイなるを祈りたまふ我親友なりかし、然らば即ち生のミザリイを察して心の苦を慰むる術もがなあらば、是れを指示しくれたまふ可き道徳上の義務をもちたまふ御身なるべし、是れ即ち生が誰にも語らぬ心中の苦を打ち明けて、貴嬢に書き送りまいらす所なりかし」（注三十五）と書いている。美那子は「親友」のように、「生のミザリイを察して」「心の苦を慰」めてくれるので、「生が誰にも語らぬ心中の苦を打ち明け」ると、心の奥のところを理解し、慰めてくれる人であるというのである。

さらに、「（（北村門太郎の））一生中最も惨憺たる一週間」には「嗚呼余の活発なる生活と嬢の栄誉ある生活と一致せば、吾人の快楽は果して如何ぞや、余は凡夫の一疾病者なり、嬢は真神の庭に生長する葡萄〔葡萄カ〕（注三十六）の美果なり、嬢は此ラブを以て一時の音樂の如く面前を通過せしむるを得たり、余は即ち然らば、一度び会し一語を交る毎にラブの堅城愈固く」（注三十七）と書いている。美那子の生活を「栄誉」ある生活と称え、美那子を「真神の庭に生長する葡萄〔葡萄カ〕の美果」と喩える。美那子を女神として崇拝する態度がうかがえる。

また、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年九月四日）では「吾等の

ラブは情慾以外に立てり、心を愛し、望みを愛す、吾等は彼等情慾ラブよりも最ソツト強きラブの力をもてり、吾等は今尚ワンボディたらざるも、常にもはや一所にあるが如き思ひあり、吾等は世に恐るべき敵なきラブの堅城を築きたり、道義の真神にも背かず、世間の俗風をも凌ぎ居る者なり、君よ請ふ生をラブせよ、生も此身のあらん限りは君をラブす可し、既に君をラブして、後にはワンボディとなるべき望みあらば、共に相慰め相励まざる可からず、我がおもしろき事ある節は語りて心を療ず可く、君に感ずる所あらば落なく話し出で給はらん事、拙の深く望む所」（注三十八）と書いている。二人の間の恋愛の激しさや結婚を希望している気持ちがよくうかがえる。二人の愛は「心を愛し、望みを愛す」、「共に相慰め相励まざる可からず」、さらに、「心を療ず可く」という愛である。透谷に必要なのは自分の理想の実現を助けてくれ、理想を追求する過程で、お互いに慰めたり励ましたりする人の存在であった。

「悲苦の世紀」には「Dearest よりの手紙ありやを求めたり、案の如く一封の書簡余をして満面に喜色を呈せしめたり、豈図らんや、書中言ふ所は最早余をして望みを依持する事を得ざらしむる最終の手紙にてありけり、嗚呼此案外の手紙の余が心を鼓したる事、如何ばかりぞや、夢にだも斯かる事のあらんとは思はざりし、余は余が小説の勉励にてDearを訪ひ行く心はなかりし、Dearは之れを催がし来れり、（中略）嗚呼余のDreary lifeを救ひくれしはDearなり」（注三十九）と書いている。美那子から手紙をもらったうれしさや「余が心を鼓」する感激の気持ちなどがうかがえる。

「嗟世に愛情より」では透谷は「真の愛情」を「吾れ（（倦む））懶む時は友来つて慰諭し、吾れ怒る時は友来つて緩誡す、病あれば訪ひ苦あれば救ふ」（注四十）ものと定義する。この真正の愛情は疲れた時、自己を「慰諭」してくれ、怒った時、自己を「緩誡」してくれ、病気にかかった時、自己を見舞ってくれ、苦しんでいる時、自己を救ってくれるものである。

透谷は小さい時から、「愛情が薄かったらしい」「冷淡」な、「女性らしい細やかさと暖かい愛情にも欠けていた」「我が利益には余り心配せぬ祖母」の継祖母に育てられたため、心から打ちとけられる人間を切望していたと考えられる。また、母・ユキを一番必要とした時、透谷は祖父母に預けられることになった。「母親の不在」と後年の「母親へのひどい落胆があった」ため、母親の理想化が生じ、理想とする女性のイメージに執着したのである。このことと、美那子を理想化し、女神化として崇めたこととは深い関係があるだろう。

四　妻・美那子と友達の回想

透谷の縊死後、妻・美那子による透谷についての回想は『『春』と透谷」、「透谷の晩年とその言行」及び神崎清が美那子の生前のインタビューを整理した「北村美那子覚書」などがある。特に、『『春』と透谷」では両親との関係に言及している。美那子は透谷の性質について、「猜忌心」のある人間で、「人の感じない所に妙な感じを起こす人でした」としているがその原因を「初めはなか

つたとしましても、弟の方ばかりが立派に母から商売上の相談を受けて、透谷の方は相手にされなかつたのですから、それに対する不愉快が重なり重なつてさうなる事が止むを得なかつたのでせう」（注四十一）とし、また「親類が皆商人なんですから話の合はぬのは無理のない事、又心の合はぬのもその筈」（注四十二）だと考えている。一番、美那子を困らせたことは「自分の心は親には思い切つて打ち明ける事も出来ず、いつも私ばかりに云ふのですから」（注四十三）ということだった。

親友であった島崎藤村の「六年前、北村透谷二十七回忌を迎へし時に」にも透谷の継祖母、母親、家族に言及している。祖母が実の祖母ではなく、彼に対する愛情の薄かったことが、後になって彼が気鬱病を発症した一番の理由であるということにも触れている。さらに、「お母さんの愛は兄なる透谷よりも寧ろそれほど神経質でない弟の方にあつまつていたらしい。透谷は母子の苦い争いを深刻に経験した人の一人だ」（注四十四）と評している。「文学界」同人の星野天知の「透谷君の思ひ出」には「又其住所を四五回訪問して居る、一度は数寄屋橋近くの父親の見世で、之は不在のため見世先きから帰つたが同君の継母らしい人が居て至極冷やかな人であつた」（注四十五）という追憶がある。

以上の心理学的検討から分かるように、母親は子供の成長には、特に乳幼児の子供の成長にとっては重要な役割をする。母親の態度は子供の性格に影響を与える場合があるし、親との長期的離別は子供の精神病質的性格の原因となる可能性があるのである。透谷とっては、ちょうど、子供の第一反抗期と呼ばれる、自意識が盛んになる時期に母親と離れた。透谷の作品に「厭世詩家と女性」といい、「処女の純潔」といい、「心機妙変を論ず」といい、両性間に起こる問題を取り扱ったものの多いのも決して偶然ではないだろう。もちろん、それは美那子との結婚生活がうまくいかないからだという考え方もできるが、それよりもっと根本的な原因は、小さいときの経験に由来すると思われるのである。

「注」

一、平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』有精堂　一九九五年一月　四十二頁

二、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　一九五五年九月十日　一六二頁

三、同右

四、『明治文学全集二十九—北村透谷集』筑摩書房　一九七六年十月　三九六頁

五、『近代文学研究叢書』第二巻　昭和女子大学近代文学研究室　一九五六年四月　一二八頁

六、平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』有精堂　一九九五年一月　四十二～四十三頁

七、生活科学調査会編『現代の生理と心理Ⅰ—幼児の生理と心理』医歯薬出版　一九五九年九月　十二頁

八、同右　二十四頁

九、同右　二十八頁

十、鈴木秀男『幼時体験―母性と父性の役割』講談社　一九八一年七月　一二九頁
十一、同右　一三一頁
十二、平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』有精堂　一九九五年一月　五十四頁
十三、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　一九五五年九月　一六三～一六四頁
十四、小田切秀雄作成「年譜」『明治文学全集二十九―北村透谷集』筑摩書房　一九七六年十月　三九六頁
十五、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　一九五五年九月　一六一頁
十六、同右　一六六頁
十七、大田正紀「透谷「厭世詩家と女性」―仮偽の愛への悲歌」『キリスト教文芸』第二巻　一九八四年十一月　一頁
十八、大野博之（ほか）編『児童心理学』ブレーン出版　一九七六年三月　八十八頁
十九、同右　八十七頁
二十、同右　九十二頁
二十一、同右　九十五頁
二十二、J・ボウルビイ『ボウルビイ母子関係入門』作田勉監訳　星和書店　一九八一年九月　一一四頁
二十三、同右　一一五頁
二十四、亀口憲治『家族力の根拠』ナカニシヤ出版　二〇〇四年十一月　一三〇頁
二十五、S・ジョンソン、S・ルーゼンスキー編『精神分析的心理療法の現在　ウィニコットと英国独立派の潮流』岩崎学術出版社　二〇〇七年九月　六十九頁
二十六、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　一九五五年九月　一六四頁
二十七、鈴木秀男『幼時体験―母性と父性の役割―』講談社　一九八一年七月　一三八頁
二十八、同右　一三七頁
二十九、同右　一四〇頁
三十、同右　一四〇頁
三十一、同右　一四一頁
三十二、S・ジョンソン、S・ルーゼンスキー編『精神分析的心理療法の現在　ウィニコットと英国独立派の潮流』　七十頁
三十三、同右　七十一頁
三十四、「夢中の詩人」『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　一五七頁
三十五、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年八月十八日）『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　一六〇頁
三十六、亀甲形の括弧〔　〕でかこんだ語句は編纂者勝本清一郎の挿入である。
三十七、「（北村門太郎の）一生中最も惨憺たる一週間」『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　一七〇頁
三十八、「石坂ミナ宛書簡」（一八八七年九月四日）『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　一八五頁

三十九、「悲苦の世紀」『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　一八七頁～一八八頁

四十、「嗟世に愛情より」『透谷全集』第三巻　岩波書店　昭和三十年九月　二〇三頁

四十一、『明治文学全集二十九―北村透谷集』筑摩書房　昭和五十一年十月　三二三頁

四十二、同右　三二四頁

四十三、同右

四十四、同右　三三四頁

四十五、星野天知「透谷君の思ひ出」『北村透谷　日本文学研究資料叢書』有精堂　昭和四十七年一月　二九九頁